様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６１８
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０７１７９

研究課題名（和文）日本近現代文学におけるゴーリキーの受容・翻訳・影響に関する研究

研究課題名（英文）Research on the Reception, Translation and Influence of Maxim Gorky's Literature in Modern Japan

研究代表者
ＢＲＵＮＡ　ＬＵＫＡＳ（Bruna, Lukas）

実践女子大学・文学部・助教

研究者番号：１０７８０８２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：ロシア小説家マキシム・ゴーリキー（1868-1936）の文学が20世紀前半の近代日本においてどのように紹介され、どのように翻訳され、また日本の作家たちにどのような刺激を与えたのかという問題は、従来の研究においてほとんど等閑に附されてきた。本研究は、このような現状を強く意識し、近代日本におけるゴーリキーの受容、翻訳および影響を研究対象とした。その結果、日露戦後の自然主義文学から1920～1930年代のプロレタリア文学にいたるまで、ゴーリキーの作品が日本において盛んに受容され、その影響が数多くの文学作品で展開されていることが明らかとなり、日本近代文学史におけるゴーリキーの新しい位置づけに貢献した。

研究成果の概要（英文）：The main focus of this research was to investigate the reception of one of the most prominent Russian novelists Maxim Gorky(Максим Горький, 1868-1936) in Japan in the first half of the 20th century, to analyse some of the most representative Japanese translations of his literary works and to elucidate the immense influence Gorky's literature had on modern Japanese writers. Based on thorough research and analysis of historical sources and literary texts this research was able to explain (among other aspects) how the reception of Gorky's literature evolved over the time or how his literary works were through the process of translation intentionally rewritten. Most importantly this research proved through comparative analysis that several literary works published in 1900s (e.g. T. Ishikawa's "Drifting"), working class literature in 1910s (e.g. S. Miyajima's "The Miner") or proletarian literature in 1920s (e.g. T. Kobayashi's early stories) were deeply influenced by Gorky.

研究分野：日本近代文学

キーワード：マキシム・ゴーリキー　日本近代文学　自然主義　労働文学　プロレタリア文学　石川啄木　宮嶋資夫　小林多喜二

１．研究開始当初の背景

（１）ゴーリキーの受容状況

20 世紀初頭、また 1920～1930 年代の日本の新聞や雑誌の内容を調べてみると、ロシア作家マキシム・ゴーリキー（1868-1936）の名前およびその作品がしばしば挙げられていることに気づく。1901 年から戦後に至るまで盛んに紹介され、翻訳され、論評されてきたゴーリキーの文学は、日本の文学者たちに深甚な影響を与えたと考えられる。明治期の石川啄木や小栗風葉、大正期の有島武郎、労働作家の宮嶋資夫と宮地嘉六、昭和初期の小林多喜二など、数多くの日本の文学者たちがゴーリキーの作品を熱心に読み、その中から読み取った様々な要素を積極的に自分の作品のなかに採り入れ、独自に展開しようとした。

（２）先行研究の皆無

（１）で述べたように、20 世紀前半の日本においてゴーリキーの文学が大いに注目され、日本の文学者たちに強い刺激を及ぼしたことが推測される。しかし、ゴーリキーの受容状況、翻訳状況、またその影響の有無について徹底的に調査し、分析・考察を行った研究はほとんどみられない。Рехо，Ким. М. Горький и японская литература（Москва:Наука，1965）をはじめ、ゴーリキーの影響を指摘したこれまでの研究は、読書歴や読書感想が記される作家の手紙や日記などの二次的文献を唯一の手がかりとしてゴーリキーの影響を指摘したに留まっていた。実際に具体的な文学作品のテキストを検討し、ゴーリキーの影響が作中にどのように表出されているのか、また作者がそれをどのように展開しているのか、言い換えれば、比較文学論的な分析に踏み込んだ研究は皆無に等しかった。

２．研究の目的

以上の現状を出発点として、本研究では、20 世紀前半の日本近代文学におけるゴーリキーの受容状況、翻訳状況およびその影響を徹底的に調査・分析・考察し、その内容を解明することを研究の目的として設定した。

（１）ゴーリキーの受容

本研究では、具体的な翻訳と日本人作家の具体的な文学作品の分析・考察に力点を置いたが、このような個別研究の前提としては、同時代の新聞雑誌に発表された作家紹介、作品梗概、文芸時評、批評や評論などを調査し、ゴーリキーおよびその作品がどのように評価されたのか、即ちゴーリキーの〈作家像〉およびその変遷を辿っていく必要を強く意識し、その解明を第一の研究目的とした。その際には、とくにゴーリキーの作品が日本で盛んに受容されていた 1900～1910 年と 1920～1930 年代に注目した。

（２）ゴーリキーの翻訳

現在、ゴーリキーの作品の新訳はまったく出版されなくなったが、1902 年～1945 年には、単行本だけで数十冊の翻訳が刊行されている。これらの翻訳の刊行が日本におけるゴーリキーの受容に大きく寄与し、読者や日本人作家に強い刺激を与えたことは言うまでもない。二葉亭四迷、正宗白鳥、徳田秋声、大塚楠緒子、小栗風葉など、ゴーリキーの作品の翻訳に関わった日本人作家も少なくない。本研究では、数多い翻訳の中から、著名な小説家による代表的な翻訳を選び、目的言語のテキストと起点言語のテキストを比較分析し、ゴーリキーの作品が日本でどのような翻訳されたのかを明らかにすることを第 2 の目的とした。

（３）ゴーリキーの影響

ゴーリキーの作品が日本人作家にどのような影響を与えたのか、その影響が具体的な作品のなかでどのように咀嚼され、どのように展開されているのか、即ち日本近代文学におけるゴーリキーの影響を実証し、説明することが本研究の最大の目的であった。なお、日本近代文学を網羅的に調査し、各作家の各作品の分析を行うことが到底不可能であるため、本研究では、ゴーリキーの影響がもっとも鮮明に表出されている作品を選び、徹底的なテキスト分析を行ったうえで、ゴーリキーの作品と日本の文学作品の影響関係を実証し、明確に説明することを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、受容、翻訳、影響という三つの研究対象を定め、各分野においては異なるアプローチを採用した。以下は各分野において採用した研究方法について説明する。

（１）ゴーリキーの受容

ゴーリキーの受容の研究については、各図書館と文学館、その他の施設に所蔵されている単行本と定期刊行物を調査し、作家の紹介、作品の梗概、批評・評論その他、ゴーリキー関係の主要文献を収集した。これらの資料の内容を分析し、ゴーリキーという作家とその文学作品は、各時代においてどのように評価されていたのか、その評価が時間の経過とともにどのように変わっていったのかということを検討した。

（２）ゴーリキーの翻訳

ゴーリキーの翻訳の研究にあたっては、著名な日本人作家が手掛けた翻訳を対象として、起点言語のテキストと目的言語のテキスト（邦訳）の徹底的な比較分析を行った上で、分析結果について考察を行った。その際には、近年の翻訳研究において提唱された方法論を意識し、翻訳の「正確さ」ではなく、寧ろ翻訳というプロセスにおいて原作がどのように〈修正〉されていくのか、即ち、日本の翻訳家たちがゴーリキーの作品をどのように書き直したのかに着目し、その書き直しの内容と目的について考えた。

（３）ゴーリキーの影響

実証的な比較文学論の観点から、日本人作家の具体的な文学作品を分析し、影響関係を解明した。その際には、読書歴や読書感想が記される作家の日記や手紙などの二次的文献を視野に入れたが、あくまでも文学作品のテキスト分析に力点を置き、テキスト分析を通して影響の内容を説明した。なお、本研究で採用した分析方法は決して作品の内容という一面にとどまらず、作品の文体や表現の類似点に着目するなど、各レベルの特質を徹底的に分析した点に特徴がある。

４．研究成果

以下は本研究の研究成果の概要について述べる。

（１）ゴーリキーの変わる〈作家像〉

明治末期・大正期・昭和初期の単行本および定期刊行物の調査を踏まえて、明治期・大正期には、浮浪者や乞食、泥棒など、社会の底辺に生きる人物らの自由奔放な生活ぶりを繰り返し描いたゴーリキーの最初期の小説群（本研究ではこれらの作品を〈浮浪者もの〉という）が高く評価されたこと、一方、1920 年代以降は、革命闘争と社会秩序の転覆を目的として掲げたプロレタリア文学の台頭にともなって、個人の反逆を描いた〈浮浪者もの〉ではなく、団結を踏まえた階級闘争を描いたゴーリキーの社会主義小説（長編小説『母』や『懺悔』など）がことに若手の文学者の関心を引くようになったこと、さらに、日本で初めて紹介されて以来、ゴーリキーは文学者のみではなく、つねに政治活動家としても注目され、しかもその政治的活動が彼の文学者としての受容のあり方に多大な影響を及ぼしたことなどを解明した。

なお、主に 1890 年代に書かれた〈浮浪者もの〉から 1905 年以降に書かれた社会主義小説へという傾向がみられるとはいえ、1920 年代の小林多喜二の初期作品は明らかにゴーリキーの〈浮浪者もの〉に掲げられた「強人思想」を強く意識して書かれていることも本研究において明らかとなった。ゴーリキーの受容およびその変遷、また、小林多喜二の初期作品にみられるゴーリキーの〈浮浪者もの〉の影響については、2017 年 12 月 9 日に開催された 2017 年度昭和文学会第 61 回研究集会で口頭発表（「「超人思想」・小林多喜二――「女囚徒」「最後のもの」の生成過程と多喜二の思想形成をめぐって」）を行い、詳しく紹介した。また、1917 年のロシア革命の思想がプロレタリア文学の勃興にどのような影響を与えたのか、そして、それによって日本におけるゴーリキーの受容がどのように変わったのかについては、2017 年 6 月 3 日に韓国ソウルの中央大学にて開催された The 8th East Asian Conference on Conflict and Harmony in Eurasia in the 21 Century で口頭発表（「Changing Perspectives: The Influence of the October Revolution on Japanese Literature」）を行った。

（２）小栗風葉のゴーリキー訳

日露戦後、ゴーリキー文学が俄かに注目される。自分の豊富な放浪体験から素材をとって作品を書くゴーリキーは、「自身の経験」を「偽」や「虚飾」をなくして書く作家と認識され、自己の問題、自己の内面の描写に主眼を置いた日本の自然主義に立場の近い作家として歓迎されたと考えられる。この時期、多くの日本作家たちと同じくゴーリキーの文学に関心を覚えた小栗風葉がゴーリキーの初期代表作のひとつである中編小説「マルワ」の翻訳を手掛け、1907 年に「強き恋」（『日本』1907・10・7～11・17、のちに『強き恋』〈春陽堂、1908・11〉として刊行）というタイトルで発表した。

連載当初より高く評価されたこの翻訳作品（重訳）を風葉が翻訳の際に底本とした英訳と比較した結果、風葉が作品名を変更し、また作品のクライマックス・シーンとなる結末の場面を省略することによって、本来ゴーリキーの作品では中心的な人物として描かれるマルワという女性から、このマルワを争う父と息子に作品の重点を移し変えようとしたことを明らかにした。

また、文学作品における「地方語」の活用をめぐる同時代の論述を意識したと思われる風葉がゴーリキー作・二葉亭四迷訳「ふさぎの虫」（『新小説』1906）に倣って作中に「べいべい言葉」を積極的に採り入れたことを本研究は指摘した。小栗風葉の翻訳方法や翻訳表現の特徴を明らかにしたのみではなく、同時代の翻訳文学における「地方語」の使用と二葉亭の翻訳表現の影響力という近代文学史上の重大問題も論じた。

以上の内容は「浮浪者のことば――小栗風葉訳「強き恋」にみる〈書き換え〉の問題をめぐって」にまとめ、2017 年 3 月に『実践国文学』に発表した。

（３）石川啄木の「漂泊思想」の原点

石川啄木の様々な文章で言及される外国の文学者や思想家のなかでロシア作家マキシム・ゴーリキーの名は特別な地位を占める。北海道に渡った 1907 年、ゴーリキーの「高俊偉大なる放浪者哲学」への関心は啄木の中でとくに強かったと思われる。本研究では函館で書かれた短編「漂泊」（1907）に着目し、作品冒頭から展開される海の描写や主人公の後藤肇の人物像はゴーリキーの文学を強く意識して構想されたことを示した。啄木文学における〈漂泊性〉はこれまで啄木自身の漂泊の経験と、それから西行や芭蕉その他の古典文学による感化と結び付けられてきたが、本研究では、啄木の〈漂泊性〉のひとつの原点はゴーリキーの作品にあることを明らかにした。

以上の内容については、2016 年 11 月 6 日に開催された 2016 年国際啄木学会盛岡大会で口頭発表を行い、加筆訂正を加えた内容を「自然の「力」への憧憬、社会の「平凡と俗

悪」への反逆――石川啄木「漂泊」にみるゴーリキー文学の影響」として2017年11月に『日本近代文学』に発表した。
なお、本論の研究貢献度が評価され、2017年度国際啄木学会若手研究者助成を与えられた。

（4）国内外への発信

本研究は、国内外において従来ほとんど注目されなかった問題を研究対象として、研究成果を国内のみではなく、国外においても積極的に発信した。
まず、2017年6月3日に韓国ソウルの中央大学で開催された The 8th East Asian Conference on Conflict and Harmony in Eurasia in the 21 Century: Dynamics and Aesthetics においては、1910～1920年代の日本におけるゴーリキーの受容と1917年のロシア革命との関係について研究発表を行った。
2018年はゴーリキー生誕150周年にあたり、ロシアでは研究会やシンポジウムなど様々な記念事業の開催が予定されているが、記念事業の一つとして、3月26日より3月30日までロシア科学アカデミー＝M・ゴーリキー世界文学研究所（モスクワ）にて「世界におけるM・ゴーリキーの意義――M・ゴーリキー生誕150周年記念国際会議」が開催された。 世界各国のロシア文学研究者が集まる本シンポジウムに研究代表者が参加し、日本におけるゴーリキーの受容状況および影響について研究発表を行い、好意的な反応を得た。
なお、研究代表者が寄稿した本国際会議の論文集が2018年度中に刊行される予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① ブルナ・ルカーシュ、自然の「力」への憧憬、社会の「平凡と俗悪」への反逆――石川啄木「漂泊」にみるゴーリキー文学の影響、日本近代文学、査読有、Vol. 97、2017年11月、pp.17-32

② ブルナ・ルカーシュ、浮浪者のことば――小栗風葉訳「強き恋」にみる〈書き換え〉の問題をめぐって、実践国文学、査読有、Vol. 91、2017年3月、 pp.36-53

〔学会発表〕（計5件）

① ブルナ・ルカーシュ、Fascinated by the Image of the Free-Spirited Vagabond: On the Reception of Maxim Gorky's Literature in the Early 20th Century Japan, Международная научная конференция «МИРОВОЕ ЗНАЧЕНИЕ М. ГОРЬКОГО»、ИНСТИТУТ МИРОВОЙ ЛИТЕРАТУРЫ ИМЕНИ А.М. ГОРЬКОГО, РОССИЙСКОЙ АКАДЕМИИ НАУК, モスクワ、2018年3月29日

② ブルナ・ルカーシュ、ゴーリキー・「超人思想」・小林多喜二――「女囚徒」「最後のもの」の生成過程と多喜二の思想形成をめぐって、2017（平成 29）年度昭和文学会第61回研究集会、2017年12月9日

③ ブルナ・ルカーシュ、Changing Perspectives: The Influence of the October Revolution on Japanese Literature、The 8th East Asian Conference on Conflict and Harmony in Eurasia in the 21 Century: Dynamics and Aesthetics, Chung-ang University, Seoul, 2017年6月3日

④ ブルナ・ルカーシュ、自然の「自由」への憧憬、社会の「俗悪」への反逆――石川啄木「漂泊」にみるゴーリキー文学による感化、2016年国際啄木学会盛岡大会、2016年11月6日

⑤ ブルナ・ルカーシュ、「べいべい語」を話す浮浪者たち――二葉亭四迷、小栗風葉、田山花袋にみる「地方語」の使用・意義について、花袋研究学会第 56 回定期大会、2016年6月18日

６．研究組織

(1)研究代表者

ブルナ・ルカーシュ（BRUNA, Lukas）
所属研究機関　実践女子大学
部局　文学部　国文学科
職名　助教

研究者番号： 10780827